

感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成24年）

徳島県立保健製薬環境センター

嶋田 啓司・石田 弘子

Infectious diseases surveillance reports in Tokushima Prefecture in 2012

Keiji SHIMADA and Hiroko ISHIDA

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回平成24年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の77疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける26疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までの1週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

III 結果及び考察

1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

(1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

(2) 二類感染症

① 結核

結核は前年（291件）より減少したものの、241件の届出があった。月別届出数は13～30件で推移し、季節的変動は

見られなかった。

年齢別ではすべての年齢層から届出があったが、年齢が高くなるのに伴い届出数が多くなり、60歳以上が全体の約59%を占めた。性別では男女ほぼ同数の届出数であった。

症状別では、「患者」165件（内訳：肺結核106件、その他の結核47件、肺結核およびその他の結核12件）、「疑似症患者」11件、「無症状病原体保有者」65件であった。

年齢別に症状を比較すると、60歳以上では「患者」が約99%を占めたのに対し、60歳未満では36%と「無症状病原体保有者」の割合（64%）が高かった。また、「無症状病原体保有者」の職業別では医療・介護関係者が約半数（48%）を占めており、医療・介護施設における感染予防対策が重要と考えられた。

(3) 三類感染症

① 細菌性赤痢

細菌性赤痢は12月に1件届出があった。検出された菌は *Shigella flexneri* で、インド・ネパールへの旅行中に感染したと推定された。

② 腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症は7件届出られ、過去5年間では最も少なく、月別届出数では4月～9月の夏季に届出が集中し、冬季に報告は見られなかった。

診断の類型では「患者」6件、「無症状病原体保有者」1件であり、年齢別には、「患者」はすべて20歳以下の若年者であり、「無症状病原体保有者」は40歳代であった。

症状では、腹痛、水溶性下痢が71%、血便が57%、発熱、嘔吐が14%見られた。重症の合併症である溶血性尿毒症症候群（HUS）も1例報告された。

感染経路や感染源は、本疾患の潜伏期間が2～14日と比較的長いことより原因の特定には至らないことも多いが、発症前に焼き肉店で喫食していた事例1件、また患者との接触による二次感染が推定される事例も1件あった。

(4) 四類感染症

① オウム病

オウム病は5月に1件の届出があった。推定感染経路は自宅で飼育していた「セキセイインコ」からと推定された。

② つつが虫病

つつが虫病は1件(年齢:70代)の届出があった。報告月は発生報告の多い秋～春先にあたる12月、推定感染地は県内であった。

③ デング熱

デング熱は9月に1件の届出があり、推定感染地域はフィリピンであった。過去5年間では、平成22年に2件、平成23年に1件発生し、いずれも海外流行地での感染であった。デングウイルスは、現在国内に常在していないが、将来、感染者の増加により国内常在する危険性もあるため、海外流行地への渡航時には予防対策の啓発、発生した場合の防疫対策が重要と考えられる。

④ 日本紅斑熱

日本紅斑熱は1件(年齢:50代)届出があり、前年(10件)から減少した。届出月は9月、県内でマダニ等に刺咬され感染したと推定された。登山、森林作業、農作業など野外作業機会の多い中高年者を中心に、SFTS(重症熱性血小板減少症)、つつが虫病などのダニ媒介性疾患に対する予防対策・啓発が必要と考えられた。

⑤ レジオネラ症

レジオネラ症は3件届出があり、病型はいずれも「肺炎型」であった。推定される感染地域は県内であり、感染経路は水系感染が1例、不明2例であった。

(5) 五類感染症

① アメーバ赤痢

アメーバ赤痢は、2件の届出があった。年齢は40～50歳代、性別は男性、内1名の感染経路は性的接触によるものと推定された。

② クロイツフェルト・ヤコブ病

クロイツフェルト・ヤコブ病の届出は4件あり、過去5年間では最も多かった。年齢は60歳以上で病型は「孤発性プリオン病」であった。

③ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は2件の届出があり、年齢層は40～50代、感染経路は創傷からの感染が推定された。

④ 後天性免疫不全症候群

後天性免疫不全症候群は4件報告された。いずれも年齢は30～40代、性別は男性、病型は「患者」3件、「無症候性キャリア」1件であった。推定感染経路は不明1件を除き、国内での同性または異性間性的接触であった。今後も20～40代を中心とした幅広い年齢層に対し、HIV感染の早期発見による早期治療と、本疾患に対する普及啓発により感染拡大の抑制に努めることが重要である。

⑤ ジアルジア症

ジアルジア症は12月に1件の届出があった。細菌性赤痢との混合感染例であり、インド・ネパールを旅行中に感染したと推定された。

⑥ 梅毒

梅毒は1件の届出があった。10歳代の女性で、病型は「早期顕症梅毒」I期、感染経路は国内での性的接触と推定された。

⑦ 破傷風

破傷風は3件の届出があった。年齢は60歳以上、推定感染経路は国内での屋外作業における創傷感染であった。

表1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成24年	前年
二類	結核	241	291
三類	細菌性赤痢	1	0
	腸管出血性大腸菌感染症	7	14
四類	オウム病	1	0
	つつが虫病	1	0
	デング熱	1	1
	日本紅斑熱	1	10
	レジオネラ症	3	2
五類	アメーバ赤痢	2	3
	クロイツフェルト・ヤコブ病	4	1
	劇症型レンサ球菌感染症	2	0
	後天性免疫不全症候群	4	6
	ジアルジア症	1	0
	梅毒	1	1
	破傷風	3	1

2 定点把握対象疾患の動向(表2)

(1) インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)

年間報告数は11,784件、前年(5,686件)と比較すると約2倍の報告数にあたり、過去5年間では新型インフルエンザ

(AHIpdm) が流行した平成 21 年に次ぐ多さであった。本年の前期流行は、前年末より増加し始めた報告数が第 1 週より急増し、第 5 週にピーク (45.6 件/定点) を迎えた。第 7 週より減少傾向となったが、再び第 12 週に小さなピーク (14.5 件/定点) をつけ、以後減少した。ピークの高さ、警報・注意報の発令期間 (第 3~12 週) とも前年 (ピーク: 22.9 件/定点, 発令期間: 第 4~6 週) を大きく上回った。後期は第 47 週より報告数が上昇し始め、第 52 週に 1.79 件/定点となり翌年の流行シーズンを迎えた。年齢層別報告数では、4 歳以下 21.1%, 5~9 歳 35.9%, 10~14 歳 18.2%, 15~19 歳 3.1%, 20 歳以上 21.8% であり、前年と比較して 14 歳以下の割合が増加していた。

(2) RS ウイルス感染症

年間報告数は 1,302 件であり、前年 (1,320 件) と比べほぼ同じ報告数であった。前期流行は特にピークが見られず、第 12 週頃まで全国平均よりやや高い水準で推移し以後減少した。後期流行は特徴的で、例年より約 2 ヶ月早い 8 月下旬より報告数が増加し始め、第 40 週で最初のピークとなった。以後、報告数は減少したものの第 45 週から再び急増し、第 47 週からは全国平均を大きく上回る流行となり、第 51 週に 2 回目のピーク (6.7 件/定点) を迎えた。年齢層別報告数では、0 歳 38.0%, 1 歳 34.6%, 2 歳 15.4%, 3 歳以上 12.2% であり、前年と同様に 2 歳以下の割合が約 90% を占め、乳幼児に多発する傾向が見られた。

(3) 咽頭結膜熱

年間報告数は 490 件であり、前年 (458 件) よりやや増加した。本年は大きなピークは見られなかったが、全国の流行状況と同様に第 17~34 週にかけ報告数の高い状態が続いた後、緩やかに減少した。以降は第 43 週、第 46 週に小さな山が見られたものの地域流行には至らなかった。年齢層別報告数は、1 歳以下 23.5%, 2~3 歳 36.7%, 4~5 歳 28.6%, 6~7 歳 6.7%, 8 歳以上 4.4% であり、5 歳以下が約 90% を占めた。

(4) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 1,807 件あり、多かった前年 (1,449 件) よりさらに約 25% 増加し、過去 10 年間では最も多い報告数となった。本年は早春から初夏にかけ報告数が高い水準で推移し、第 22 週には年間ピーク (3.4 件/定点) を示した。その後緩やかに減少したが、11 月初旬より冬季流行に向けて報告数が増加傾向となった。年齢層別報告数は 0~1 歳 3.2%, 2~3 歳 15.1%, 4~5 歳 31.5%, 6~7 歳 28.3%, 8~9 歳 12.3%, 10~14 歳 10.3%, 15 歳以上 2.7% であった。

(5) 感染性胃腸炎

年間報告数は 9,263 件、前年 (7,791 件) から約 20% 増加となり過去 5 年間では最も多い報告数となった。本年の前期流行は前年第 46 週より報告数が増加し始め、第 52 週で最初のピーク (11.9 件/定点) を示した後、1 月から 4 月中旬は 5.6~9.7 件/定点で推移した。そして再び増加傾向を示し 5 月中旬 (第 21 週: 14.3 件/定点) の第二のピークを経て徐々に減少、7 月~10 月にかけては報告数が 3~5 件/定点前後で推移した。後期流行は 11 月初旬 (第 45 週) から報告数が急増し、第 50 週にピーク (21.7 件/定点) を迎え報告数の多い状態のまま越年した。年齢層別報告数は、0~1 歳 28.7%, 2~3 歳 22.7%, 4~5 歳 16.5%, 6~7 歳 9.3%, 8~9 歳 6.8%, 10~14 歳 8.7%, 15 歳以上 7.3% と 5 歳以下が全体の約 70% を占めていた。

(6) 水痘

年間報告数は 1,765 件であり、前年 (1,612 件) からやや増加した。本年は、前年 10 月中旬 (第 42 週) 頃より始まった流行を受け、5 月頃 (第 22 週) まで全国平均よりやや高い水準で推移した後、減少した。そして 11 月 (第 45 週) に入り報告数が増加し始め、第 47 週でピーク (3.1 件/定点) を示し、年末まで高い (1.5~2.4 件/定点) 報告数のまま越年した。年齢層別報告数では、0~1 歳 20.0%, 2~3 歳 38.5%, 4~5 歳 27.9%, 6 歳以上 13.6% と 5 歳以下の報告が全体の約 85% を占めた。

(7) 手足口病

年間報告数は 151 件と、過去 10 年間で最大の流行となった前年 (2,819 件) から大きく減少した。最も多かった第 35 週でも報告数は (0.7/定点) と年間を通じて低位で推移し、流行は見られなかった。

年齢層別報告数では、0~1 歳 37.1%, 2~3 歳 35.8%, 4~5 歳 14.6%, 6 歳以上 12.6% と 3 歳以下からの報告が約 73%, 5 歳以下では全体の約 87% を占めており、前年と同様の傾向であった。

(8) 伝染性紅斑

年間報告数は 448 件であり、4 年ぶりの大流行となった前年 (729 件) に比べ約 6 割の報告数に減少したが、過去 5 年間では 2 番目の多さであった。本年は、前年からの流行を受け 1~5 月中旬は 0.5~1.0 件/定点と全国平均よりやや高い水準で推移した後、年末にかけ緩やかに減少した。年齢層別報告数では、4~5 歳が 29.6% と最も多く、次いで 6~7 歳 25.7%, 2~3 歳 19.1% の順となった。昨年と比べて、4~7 歳の割合が大きく増加した。

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス 感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌 咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1/2~	153	19	5	28	204	29	4	15	10			39		1
2	1/9~	290	25	8	39	172	26	4	17	13		2	40		
3	1/16~	864	32	3	35	210	28	3	14	12		3	33		
4	1/23~	1,337	23	7	35	141	48	3	19	8		2	19		
5	1/30~	1,732	29	5	35	129	43	4	15	13		2	30		
6	2/6~	1,702	21	9	40	154	57	1	11	9		2	31		
7	2/13~	1,347	23	7	45	147	29		9	18			15		
8	2/20~	934	32	4	55	147	33	2	5	13	1		39		
9	2/27~	556	39	8	21	169	24	11	7	24	1	5	34		
10	3/5~	452	31	7	37	138	39	5	14	14		1	29		
11	3/12~	434	44	16	38	144	45	4	4	21		4	20		1
12	3/19~	551	27	9	37	160	50	2	14	17		2	26		
13	3/26~	368	11	7	38	160	33	3	22	18		2	24		2
14	4/2~	233	5	6	38	161	42	1	16	10		1	24		
15	4/9~	192	17	6	29	198	16		13	17	2	5	23		
16	4/16~	169	7	12	31	224	27		15	25		7	14		1
17	4/23~	152	7	14	55	246	37	2	21	22	1	2	11		1
18	4/30~	57	4	7	21	248	26		8	30	1	4	21		
19	5/7~	31	4	8	73	239	35		8	24		5	11		1
20	5/14~	29	5	17	61	253	40		12	22	1	6	16		
21	5/21~	19	4	14	58	329	42	1	14	20		8	16		
22	5/28~	3	2	22	77	260	47	3	12	21		13	7		1
23	6/4~	1		12	48	246	35	3	13	13		15	11		2
24	6/11~	4	3	23	64	186	37	3	11	33		23	13		
25	6/18~	2	1	20	38	124	26		13	22	1	25	9		
26	6/25~			16	40	128	29	3	13	22		28	11		
27	7/2~			15	38	134	25	2	10	18		31	20		
28	7/9~			21	28	136	32	5	9	25	3	31	19		
29	7/16~	1		10	36	105	28	2	8	31		38	11	1	
30	7/23~			15	25	85	36	5	9	30		32	9		
31	7/30~		2	11	21	101	22	4	3	16		52	6		1
32	8/6~	2	2	14	28	88	26	9	4	37	2	64	11		
33	8/13~		1	12	12	107	29	8	5	21		46	2		
34	8/20~		3	16	24	78	24	13	2	25		54	5		
35	8/27~		6	5	20	82	15	15	4	24	1	32	5		
36	9/3~		7	12	24	75	24	10	7	17		30	5		3
37	9/10~		12	4	13	99	19	6	7	21	1	26	4		2
38	9/17~		11	7	18	97	25	4	6	15		9	4		1
39	9/24~		19	4	22	79	17	1	5	19		13	7		1
40	10/1~		48	4	17	78	26	1	4	24		10	2		
41	10/8~		30		18	94	25		7	28	1	2	4		1
42	10/15~		22	8	24	117	23		4	20		1	4		
43	10/22~		21	13	29	92	32		4	19		4	3		
44	10/29~		22	10	22	114	22		2	21			6		
45	11/5~		33	1	39	171	48		2	25		2	2		1
46	11/12~	2	37	16	25	182	49		2	17	2	1	4		
47	11/19~	6	43	6	45	250	71	2	3	23	1		2		
48	11/26~	7	69	5	48	341	41			16			1		
49	12/3~	13	87		29	360	46	1	1	19			3		
50	12/10~	22	138	3	23	498	54		4	18		1	5		
51	12/17~	51	153	2	42	407	34	1	1	19			4		
52	12/24~	68	121	4	21	376	49			18		2	6		1
	合計	11,784	1,302	490	1,807	9,263	1,765	151	448	1,037	19	648	720	1	21

(9) 突発性発しん

年間報告数は1,037件であり、前年(743件)と比べ約40%増加し、過去5年間で最も多い報告数となった。本年も季節的な変動は少なかったが、年間を通じ前年より高い報告数で推移した。年齢層別報告数では、例年と同様1歳以下が最も多く79.3%を占めたが、前年と比べ2歳以上の報告数が5.7%から20.7%と大きく増加しており、今年の報告数増加は2歳以上の年齢層の増加によるものと推察された。

(10) 百日咳

年間報告数は19件であり、地域流行が見られた前年(32件)から減少したが、前々年(18件)とほぼ同数であった。年齢層別報告数では、10～14歳が31.6%と最も多く、次いで1歳未満が21.1%であり、全国と比べ10～14歳の割合が高く、20歳以上の報告数割合は少なかった。

(11) ヘルパンギーナ

年間報告数は648件と、6～7月に大きな流行が見られた前年(1,216)と比べ半減した。本年の流行は5月下旬から9月にかけて多く報告され、流行期間は前年と比べ長かったものの、ピークは第32週(2.8件/定点)と大きな流行が見られないまま推移した。年齢層別報告数では、1歳以下40.7%、2～3歳37.5%、4～5歳14.7%、6歳以上7.1%であり、3歳以下が約八割を占めた。

(12) 流行性耳下腺炎

年間報告数は720件であり、流行年であった前年(1,777件)と比べ半数以下の報告数であった。過去10年間では、平成13～14年、平成17～18年、平成22～23年と数年おきに2年続けての流行が見られている。本年の推移は前年からの流行を受けて始まり、第2週及び第8週と二つのピーク(1.7件/定点)を示すなど全国平均より高い状態が第20週頃まで続いた後、緩やかに減少した。年齢層別報告数では、4～5歳が34.6%と最も多く、次いで6～7歳23.3%、2～3歳17.5%と、全国平均同様に2～7歳の報告数が全体の約75%を占めた。

3 眼科定点報告対象疾患の動向

(1) 急性出血性結膜炎

年間報告数は1件、過去5年間でも徳島県内での流行は見られていない。全国でも昨年は夏季及び秋季に流行が見られたが、本年は見られなかった。

(2) 流行性角結膜炎

年間報告数は21件であり、前年(19件)とほぼ変わらず、定点あたり報告数も0.75件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、30歳代33.3%、40歳代28.6%、50歳代が14.3%と30～50歳代が約76%を占めた。

4 基幹定点報告対象疾患の動向

(1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎の年間報告数は2件と前年(5件)から減少した。年齢層別報告数は、1歳未満、80歳代が各1件ずつであり、病原体では肺炎桿菌が1件検出されている。

無菌性髄膜炎は9件報告され、前年(11件)からやや減少し、発生時期は冬季と夏季にみられた。年齢層別報告数では、5歳未満3件、5～9歳5件、10～14歳1件であり、病原体ではムンプスウイルスが1件、マイコプラズマが2件検出されている。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は55件、過去10年間で最も多かった前年(88件)に比べて約60%に減少した。年齢層別報告数では、1～5歳43.6%、6～9歳38.2%、10～14歳16.4%、20歳代以上1.8%であった。1～9歳の報告数が全体の約82%を占め、幼児及び学童に多い傾向がみられた。

クラミジア肺炎は報告がなく、過去5年間の発生状況をみても前々年に1件報告があったのみである。

(2) 月報告対象疾患(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は366件であり、前年(353件)とほぼ同数であった。過去5年間でも平成22年(473件)以外は350～400件で推移し、大きな変化は見られていない。

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の年間報告数は350件(男性217件、女性133件)あり、前年(338件)と大きな変化はなかった。年齢層別でも前年同様60歳以上からの報告が多く全体の約84%を占め、各年齢層いずれも男性の報告が多かった。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症は11件(男性7件、女性4件)報告され、前年(13件)と比べ変化は見られなかった。年齢別も前年同様に10歳未満(約64%)と70歳以上(約27%)の報告が多かった。

薬剤耐性緑膿菌感染症の報告数は5件(男性3件、女性2件)、前年(2件)からやや増加した。年齢層はすべて70歳以上であった。

薬剤耐性アシネトバクター感染症は、平成23年2月から新たに追加された疾患であり、平成23、24年とも報告がなかった。

表3 基幹定点（月報）報告対象疾患の月別報告数

	β内酰胺耐性 黄色ブドウ 球菌感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性 緑膿菌 感染症	薬剤耐性 アシネバクター 感染症
1月	32	-	-	-
2月	28	1	1	-
3月	28	-	-	-
4月	21	1	-	-
5月	36	-	1	-
6月	33	1	-	-
7月	18	1	1	-
8月	40	-	1	-
9月	24	2	-	-
10月	23	3	-	-
11月	32	1	-	-
12月	35	1	1	-
合計	350	11	5	-
前年	338	13	2	-

5 性感染症定点報告対象疾患の動向（表4）

性感染症患者総報告数は316件、前年（311件）とほぼ同数であり、過去5年間でも毎年300～400件で推移している。男女別では、男性240件、女性76件と、男性が女性の約3倍多く報告され、疾患別では性器クラミジア感染症（42.1%）、性器ヘルペスウイルス感染症（33.5%）、尖形コンジローマ（18.4%）、淋菌感染症（6.0%）の順に多く、毎年同様の傾向が見られている。

性器クラミジア感染症の年間報告数は133件と、前年（147件）より約10%減少した。男女別では、男性116件、女性17件と全体の約9割が男性であり、年齢別報告数では、20歳代33.1%、30歳代33.1%、40歳代20.3%と20～40歳代の報告が全体の86.5%を占めた。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は106件（男性59件、女性47件）であり、前年（93件：男性35件、女性48件）に比べ男性の報告数が約70%増加した。また性感染症全体で見ると男性が女性の約3倍多く報告されているが、本疾患は女性報告数の割合が他の疾患に比べ高かった。年齢別では、20～60歳代の各年齢層とも15～20件とほぼ同数報告され、また60歳以上の報告数が28件と他の性感染症と比較してこの年代の占める割合が高いが、高齢者では潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられた。

尖形コンジローマは58件（男性47件、女性11件）報告され、前年（44件）に比べ約30%増加した。本疾患も性器ク

ラミジア同様に男性が約8割と大半を占め、20～40歳代の報告が全体の約86%を占めた。

淋菌感染症の年間報告数は19件、前年（37件）の約半数に減少し、過去5年間減少傾向を示している。男女別では大半が男性の報告であり、女性の報告は1件だけであった。年齢層別では20～40歳代の報告が最も多く、20～30歳代が全体の約84%を占めた。

表4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖形 コンジローマ	淋菌 感染症
1月	18	13	5	2
2月	8	13	5	1
3月	13	8	4	-
4月	4	6	1	2
5月	10	8	6	1
6月	14	2	5	2
7月	14	9	5	1
8月	15	14	8	3
9月	12	8	2	3
10月	10	12	2	-
11月	6	7	5	3
12月	9	6	10	1
合計	133	106	58	19
前年	147	83	44	37

IV まとめ

平成24年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について、その動向を検討した。

全数把握対象疾患では、「結核」が全体の約9割を占めた。報告数は前年より減少したものの、医療関係者で「無症状病原体保有者」の報告も多く、医療・介護施設における院内感染予防対策の啓発が重要と考えられた。腸管出血性大腸菌感染症は過去5年間で最も少なく、平成24年6月厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止の効果があつたと推察された。また、海外からの輸入感染症として「細菌性赤痢」、「ジアルジア」、「デング熱」が届出られ、海外渡航に際しての感染症予防、発生した場合の防疫対策の徹底について、さらに啓発していきたい。

定点把握対象疾患では、「インフルエンザ」、「感染性胃腸炎」、「突発性発疹」の報告数が増加した。前年、過去10年間において最も多い報告数となった「手足口病」、「伝染性紅斑」、「流行性耳下腺炎」の3疾患については2年続けての流行は

みられず、特に「手足口病」は前年の10%以下の報告数であった。また「RSウイルス感染症」について、年間報告数は前年とほぼ同数であったが、乳幼児を中心に例年より早い秋口から全国平均を上回る流行が見られた。

眼科定点報告疾患では、急性出血性結膜炎は1件のみの報告であり、流行性角結膜炎は前年と変化がなかった。

基幹定点報告疾患では、週報告対象疾患の無菌性髄膜炎は前年とほぼ変わらず、マイコプラズマ肺炎については、過去10年間で最も多く報告された前年と比べ減少した。

月報報告対象疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化はなく「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。

性感染症患者総報告数も過去5年間で大きな変化もなく推移している。男女別においては、男性が女性の約3倍多く報告されており、報告数の多い20～30歳代の男性を中心に引き続き啓発を行うとともに、10歳代からの若年者に対する予防教育も重要と思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行ってきたい。